令和5年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「　土砂災害を目の当たりにして　」

富山県　富山市立八尾中学校　２年　京（きょう）　優希（ゆうき）

数ヶ月前。私は小規模ではあったが土石流を目の当たりにした。そんな私は、この経験から、土砂災害をはじめとする、災害に関心を持ち、災害から命を守るためにはどうしたらよいのか、考えるようになった。

私は富山県に住んでいる。私は今までに大きな災害を経験したことがなく、富山県は安全だと過信していた。実際に、富山県は、過去 30 年間の地震と台風の発生回数が日本で最も少なく、災害の少ない県の一つである。そんな富山県だが、今年７月、県内各地で大雨による土砂災害や洪水が起きた。

７月 12 日、晴天が続き夏本番を迎えようとしていた頃、この日も気持ちの良い晴れの日だった。ところが、夜になると天気が崩れだし、昼間の空がうそだったように雨が降りだした。それはだんだん激しくなり、９時を過ぎたころには、家中に打ちつける雨音が響くほどになった。気づけば県内に土砂災害警戒情報が発表され、危険な場所から全員避難のレベル４となっていた。母は、一人で暮らす祖母の心配をしていた。なぜなら、祖母の家は、木が茂る急斜面の下にあり、土砂災害警戒区域に指定されているからだ。刻々と増す雨音に不安が募り、母と私は祖母の家へ向かった。車内は打ちつける雨で視界が悪く、普段は 10 分のところ、15 分、20 分とかかった。祖母は不安だったのか、起きて、ニュースを見ていた。私たちは、雨が弱まるまで一緒に過ごそうと思っていたが、１時間半待っても状況は変わらず、結局、祖母を家に連れて帰り、一泊してもらうことにした。

翌朝、昨夜から一転、からっとした曇り空になっていた。それでも学校は休校となり、テレビでは全国に富山県の被害が報道され、事の重大さを感じた。そんな中、父から、祖母の町で土石流が起きたと聞き、父とその様子を見に行った。すると目の前には、裏の山から坂の下まで、ごつごつとした石が土と共に、コンクリートを埋めつくしている光景が。なんとそれは、祖母の家からほんの 50 メートルの場所だった。幸い、けが人はおらず、建物の倒壊はなかった。だが私は、まさかこんなに身近で起こるとは思っていなかった驚きと、あと 50 メートル違っていたらという恐怖がこみ上げていた。父も参加した、近隣住民による片付け作業によって元の姿に戻ったが、私の心にその光景は焼きついていた。

私はこの経験から、災害から命を守るために大切なことを大きく三つ考えた。

一つ目は、家族や近所の人と協力することだ。今回、危険な地域に住む祖母を避難させたり、近隣住民で土砂の片付けを行ったりというように、災害時には一人でなく、様々な人と協力することがほとんどだ。互いに支え合うことで、二倍、三倍もの大きな力になる。しかし、もしもの時に助け合えず、誰かを置いてけぼりにしたり、復興が遅れたりしたら。そんなことがないよう、日頃から、家族や近所の人とのコミュニケーションを大切にしてほしい。

二つ目は、災害への危機感を持ち、備えておくことだ。私は、土砂災害警戒情報が発表されてから、かなり時間が経ってからの行動となり、もしかしたら災害に巻きこまれていたかもしれない。動きが遅れたのは、もしもを想定した備えを怠っていたからだと思う。少しでも早く正しい行動のために、普段から、避難訓練への参加、ハザードマップでの避難場所や経路の確認、水や食料等の備蓄といった、備えを徹底してほしい。

三つ目は、正しい情報を取り入れることだ。災害への備えをしっかりしていても、いつどんな危険があるかは分からない。そこで、毎日の天気予報を確認したり、危険が迫っていれば、警戒情報の場所やレベルなどを見て、繰り返すようだが、少しでも早く正しい行動をとってほしい。

最後に、私は今まで災害を甘く見ていたが、実際に経験してから気持ちが変わった。日本では、毎年、いつどこで起きるかわからない大きな災害が起こっている。だから、みなさんには、私のように経験する前から、災害に対する危機感を持っていてほしい。そして、家族や近所の

人と協力すること、備えておくこと、正しい情報を取り入れることの三つの行動をとって、あなた自身の命、また、大切な人の命を守っていってほしい。